

小野功生 著

『ミルトンと十七世紀イギリスの
言説圏』

これからの日本におけるすべてのミルトン研究は、この浩瀚な一冊から始まるであろう。必読の名著と迷うことなく断言できる新刊書を喧伝する機会には、滅多に巡り合えるものではないが、ミルトンの全貌を歴史的に語り尽くす本書の出現は、そのような稀有な体験を書評子に与えてくれる出来事である。我が国のミルトン研究の到達点を鮮やかに示す本書を熟読することは、今や日本のミルトン研究者の必須の責務になった。

著者の生涯がこの一冊とともに終わったことも書き記す必要がなければ、無邪気な祝福が本書評を埋め尽くしていたことであろう。ミルトン生誕400年を迎えた昨年、画期的な書物の誕生と入れ替わるかのように、享年51歳で天に召された著者畢生の大作を語るに際して、あまりに人間的な哀惜の念に惑乱されるようなことがあれば、死の直前まで従容として原稿の推敲に余念がなかった敬虔な学徒の遺志に背くことは、不信心者

の私にもわかっている。にもかかわらず、未練がましい俗人の常として、始まりと終わりを重ねた無慈悲な運命を恨みつつ、故人の思い出を問わず語りに語らずにはいられない。

「新しいミルトンの本と一緒に出そうよ」と、1992年のミルトン・センターの懇親会で、小野氏が私に話しかけてきた。そのときから始まった私たち二人の共同研究の最初の成果は、同世代の中山理氏と箭川修氏も誘って、1995年に上梓した『挑発するミルトン——「パラダイス・ロスト」と現代批評』である。無名の若手研究者の共著の刊行を快く引き受けてくれた出版社は、ほどなく第一人者の名声を得ることになった小野氏の最初で最後の単著となった本書の出版社であった。思い出の始まりは、いつも思い出の終わりに重なる。

当時のミルトン・センターにおいては、ミルトンの詩と散文の研究が意図的に分断されていた。隔年ごとに詩と散文をシンポジウムのテーマに取り上げることが慣例となっていたが、散文を取り上げるときには、原則として、歴史学者などに企画を委託することになっていたのである。文学と歴史の境界線を自在に往復する現代批評に感化されていた小野氏と私は、新たな研究の動向には一瞥もくれることなく、既成の学問の棲み分けを不文律とする当時の日本のミルトン研究の硬直性が大いに不満であった。

そこで、革命史家クリストファー・ヒルのミルトン論に心酔していた無名の二人が意気投合して、旧世代を「挑発する」決意をしたのである。ミルトンの代表作の題名を『パラダイス・ロスト』とカタカナ表記にして、「現代批評」を副題に明記することは、愛すべき策士でもあった小野氏発案の出版戦略であった。代表作の題名のカタカナ表記を踏襲し続ける遺作におい

でも、ミルトンの詩と散文の両方を縦横無尽に論じるという初志を貫徹するために、革命史観に公共圏論と書物史の成果を盛り込んだ「言説圏」という批評装置が新たに提案されていて、小野氏の知の冒険は、最後までとどまるところを知らない。

初志貫徹にこだわる小野氏には、頑固なまでに古風なところもあった。私が彼を共同研究者として敬愛し続けた理由は、彼が知の冒険を恐れぬ勇気を持っていたからだけではなく、伝統的英文学研究者としての学術的素養にも習熟していたからである。名誉ある「福原記念英米文学研究助成基金」に採択された本書の40ページに及ぶ包括的な引用文献一覧が如実に語るように、膨大な一次資料を正確に解読し、先行研究を丹念に参照した上で、明晰な文体で展開される彼の議論には、小手先の批判など寄せつけぬ屈強な安定感がある。新たな時代の先頭に立った小野氏は、古き時代の掉尾を飾る学究の徒でもあった。

この見事な書物をめぐって、著者自身と真剣勝負の議論を戦わせてみたかった。あなたが掲げる「言説圏」という批評装置は、概念定義があまりに包括的すぎて、ハーバマスの「公共圏」概念に対する批判を乗り越えることができているばかりではなく、若き日のあなたを夢中にさせたミルトンの詩を単なる史料に貶めていないか。あなたを最後まで駆り立てていた原動力は、玉石混淆の言葉が入り乱れる「十七世紀イギリスの言説圏」に対する歴史的関心などではなく、ミルトンの鍛え上げられた言葉だけが時代を超えて語り継ぐことができた精神の高みに対する癒し難い憧れだったのではないか。

他界したあなたに対する問いかけは、この世に残された私自身に対する問いかけとして心に刻みつけておこう。個人的な思い出を恨みがましく回顧することではなく、過ぎ去った時代の

終わりがいつも新たな時代の始まりでもあることを証言することこそ、歴史の中を心楽しく走り抜けたあなたに対する送別の辞にふさわしいと思うからである。(彩流社、2009年3月、A5判570頁、5,500円)

——圓月 勝博 (同志社大学教授)